カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより

冬号
22年1月
No.61

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局
〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル
発行人／奥村　豊
TEL 075-366-6609　FAX 075-366-6679
E-mail: bukatu@kyoto.catholic.jp
Home Page http://www.kyoto.catholic.jp/bukatu/

教会は不要不急

奥村豊（京都教区司祭）

大規模な事故や災害によって、例年よりも死亡者の増加が見られることがある（超過死亡）。もちろん、超過死亡がマイナスになることもある。２０２０年は超過死亡が顕著に減った。自死する若年層や女性が増えたにもかかわらずだ。２０１９年に比べると１万人弱、死亡者が減ったのである。パンデミックの年であったにもかかわらずなぜそうなったのかは分からない。過去を遡るとこの超過死亡者の顕著な減少の年がある。２００９年である。実はその年も新型インフルエンザが大流行していた。どういうわけか日本という国はパンデミックが起こると死者が減少するらしい。２０２１年は春からの１か月ごとの超過死亡者が２０２０年より顕著に増加している。おそらく年間の超過死亡も大幅に増加に転じると予測できる。新型コロナが昨年ほど流行しなかったのにもかかわらずだ。なぜなのかは分からない。

新型コロナの騒動が始まって以来、統計オタクのようになっている。新聞はとっていないし、テレビも判で押したような煽り報道をし続けていたので自分で納得できるような認識を得たいと思い、厚労省や東洋経済オンラインの統計数字をパラパラ検索していたら、そのようになってしまった。自分は根っからの文系かと思いきや、確かに学校での数学の成績は芳しくなかったが、塾で働きだしてからは小中高の算数・数学を教えていたし、思い返せば教育統計（偏差値など）や心理学統計が妙に気に入って勉強より統計そのものを面白がっていたこともある。というわけで数字を見たり、表やグラフの分析をするのは苦にならない。それで新型コロナの数字を毎日毎日追っていくことで、この感染症がインフルエンザほどには危険ではないという認識に至った。インフルエンザの流行期には１週間で２００万人が感染することもある。それに比べると新型コロナは果たして流行していると言えるのかが怪しいほど感染者が少な

い。それはわたしの認識なので他者に押し付けはしない。しかし、もしこの２年も続く不可思議な社会現象のとんでもない認知の誤りで生じていたとしたら、またはとんでもない悪意の主が意図的に引き起こしているとしたなら、感染症が原因で亡くなった方々はその病気故に気の毒には思うのだが、それ以上に仕事を奪われた人、教育の機会を奪われた人、家族と長らく会えない人や死に目に会えなかった人、葬儀に参列できなかった人、長年努力してきた成果を発表できなかった人は何をもってその代償を得ることができるだろうか。

いやいや、みんなが我慢して自粛するのは当たり前だ。自分が原因で他人に感染させたらどうするの？おじいちゃん、おばあちゃんにうつして死なせたらどうするの？と子どもを脅し続け怯えさせた代償は大きいと思う。これはみんなのため、社会のため、人から指をさされないため。２０１９年まではみなさん平気で感染させたり、感染させられたりしてたでしょう？インフルエンザは脳症を起こすし、脳症の７割は子どもなのだ。にもかかわらずマスクを徹底してただろうか。三密を避けていただろうか。実に無慈悲に唾をかけあって暮らしていただろう。それはそういった密な関係を優先して採用していたからではないのか。おそらく教会でもウィルスをもらって、それが原因で亡くなった方が一定数はおられるにちがいない。それなのに「コロナだけには罹ってはならない」という意識が蔓延したのには、マスメディアの報道姿勢がもちろん大きく関与している。国民の行動制限を求める施策に対して、人権擁護の立場から当然懐疑的な視点を提示すべきはずが、驚いたことに行動自粛が美徳であるかのように、また少し感染者数（本当は PCR 陽性者数）が増えると「気の緩み」と批判する。やがて各都道府県挙げて、わが自治体からは感染者を出してはならんと言わんばかりの世論を作り上げたのだ。

お分かりだろうか。我が自治体からはハンセン病者を一掃する（無らい県運動）。このような世論形成がそれほど容易にできるのだろうかといぶかっていたこともあったが、新型コロナの騒動によって、日本社会はいつでも同じことを繰り返すことができると分かった。いやいや、コロナの規制は大した人権侵害ではないよと、これは社会のため、国家のため、みんなのためなのだとおっしゃる方もおられるだろう。しかし、わたしはワクチン投与の件も含めて大規模な訴訟問題が近い将来起こると確信している。なぜなら、この２年、身体の自由の侵害（マスク、隔離、ワクチン職域接種）、営業の自由の制限（時短営業、酒類販売の禁止）、集会の自由の制限（イベント中止）など、事実上の人権侵害が明らかに行われてきたからだ。

そんな中、教会は集会を自主的に中止した。つまり、主日のミサさえ不要不急の集まりだったことが明らかになった。それは専ら「いのちを守る」ためのいたしかたない措置であったろう。しかし敢えて楔を刺して記憶に留めておきたいことがある。それは、不要不急なことであるからこそ集会の自由は守られるべき人権だということ。

必要不可欠なことだけが守られるべきという発想は言論統制を容易にする。ついでに書いておくと、不要不急の事柄が個人のみならず共同体をも成長させていくのだ。ぼやきついでに本当の最後に言いたい。猫も杓子もZOOM会議とは片腹痛い。身体性の欠如はまちがいなく共同体を崩壊させる。バーチャルコミュニティーをリアルと思い込まされて、コントロールしやすい奴隷に成り下がるのが落ちだ。メディアの便利さに踊らされて、気が付いたらメディアの方が人間をコントロールしてしまう。そんなことはチョムスキーでなくても直感できるだろう。体が動けるうちは時間をかけても移動し、唾をかけあって話をするのが人間である。実際にそうした方が免疫が高まるのではなかろうか。

ゴホン、ゴホン、しかし風邪には気を付けて。食塩水での鼻うがいをお勧めする。

誰ひとり取り残されない社会を目指す

太田　勝（福音の小さい兄弟会）

―正平協大阪大会・１８分科会「脱成長コミュニスム」の報告―

京都の正平協メンバーから、斎藤幸平さんの『人新世の「資本論」』読むよう薦められました。「自分が求めていた価値、それを実現する社会をわかり易く　言語化したものに出会いました。」との感激をこめての今年４月末のお誘いでした。ぼくは昨年、白井聡さんの『武器としての「資本論」』を読み、これは資本主義に包摂＝取り込まれてしまっている労働者・市民へのすばらしい「立ち上がろう！」とのメッセージだと思っていましたので、同じような本はもういいやと思いましたが、同書まで購入・同封されており、その熱に押されて、読んでみました。

見捨てない、誰も取り残されない社会、とう目標が『人新世の「資本論」』にも気候正義の目標として掲げられてあり、どこかで聞いたなと思ったら、フランシスコさんの「Fratelli Tutti」＝みんな兄弟のメッセージですね、これの具体化が今年の正平協・大阪大会「すべてのいのちを守ろう」―誰も置き去りにしない世界に向けて―でしょう。

正平協大阪大会は、分科会を募集しているので、『人新世の「資本論」』を読もう、という分科会をやるのはどうでしょう。偉い人は呼ばないで、自分達でこの本を起爆剤にして運動を起こす、という試みをしたいですね。というような流れで、分科会に応募し、18 分科会「脱成長コミュニスム」意見交換会となりました。

オンラインとのことで、ZOOM に慣れるための練習を実行委員会から、させられたし、自分達（和歌山で４人の協力者がいました。）でもミーティングを 10 月には繰り返しました。分科会参加者との練習も数回行いましたが、問題はパソコン不慣れで、参加を諦めている人たちを「取り残してしまうわけにはいかない。」という事でした。幸い「信徒の会」の集いが 10 月 16 日に行われましたので、そこで 18 分科会への参加希望を聞きました。オンラインだからと諦めていたけど、サクラファミリアに集まれるなら参加したいという人が 6 人いて、息子にパソコンを教えてもらっているが不安なので、やはりサクラファミリアに来ます、という人などが 2 人、いることが分かりました。

さて、22 日の当日は、パソコンの不調で参加時間が減ってしまった人が 2～3 人いらっしゃいましたが、大会実行委員会のサポートや 18 分科会スタッフの協力で、意見交換会をすすめる事が出来ました。午後 2 時の開会式を YouTube で見たあと、自己紹介をまずお願いしました。氏名・所属教会の後に、18 分科会参加の動機を語っていただきましたが、「脱成長コミュニスム」分科会にふさわしく、大多数の参加者が「現状から脱出して新しい社会を目指したい」と望み、『人新世の「資本論」』を読んだ方は参加者 24 名の内 13 名もいました。

自己紹介の後に、発題者から、斎藤幸平さん出演の「100 分 de 名著」①格差の

ビデオが 25 分間映写されました。ビデオ終了後 5 分間、感想を書く時間があり、15 分の休憩に入りました。休憩後の「意見交換会」

○ビデオで労働力を売らなければ生きていけない資本主義下の労働者の発生の歴史が分かった。共有を取り戻さねば、労働者の幸せはない。
○少人数の原始キリスト教を思う。国家単位では、貧富の差が拡大し修正が必要・ベーシックインカムなど共産主義に近づいてきている・キリスト教の原点に返り、貪欲飽食を考え直すべき・ラウダート・シやフラテリツッチの精神・ルソーの言葉「果実は独り占めにするな、皆のものだと叫ぶ人が居たら社会はもっと良くなっていたはず。」
○斎藤幸平さんは 34 才、グレタさんは 18 才。若い人が怒りを持っているが、今回の選挙では 10 代・20 代は自民党が多い。日本は保守的すぎる。
○アメリカの大統領選挙では若い人はサンダース支持、社会主義で、イギリスの若者は共産主義的。
○斎藤さんのバルセロナの例では、若い人のみではなく「市民」が動いた。
○水は社会の富：2000 年東京の水は飲めなかったので、水は買って飲んだ。資本家が水を独占して販売している。無料の水を有料にした資本主義の罪。
○（パソコン不調が直って再参加）ビデオでは、「物象化」の恐ろしさをみた。大きすぎて潰せない銀行・巨大多国籍企業からは税金が取れない・タックスヘブン・住宅は住むためではなく、再び売って儲けるための物件になってしまっている・イギリスの富の 75%は 1%の金持ちが所有している・　旧約のヨベルの年のすばらしい思想を生かしたい。

続いて１７：００より「祈りの集い」

初代教会の「信者は心を一つにして、持ち物を売り、貧しい人は一人もいなかった」との使徒行録 2 章 40 節～47 節の朗読とルカ 6 章 20～26 節「貧しい人々は幸いである」の朗読の後、おおたコメントがあり、その後に分かち合い：

11 月 23 日 AM10 時　第 2 日目
23 日より参加の方の自己紹介。続いて、おおたからの 22 日の要約報告
10 時 10 分より、100 分 de 名著④**コモンの再生**の視聴。森のバターといわれるアボガド生産は現地の土地を疲弊させている、などなど。
視聴の感想を、お願いしました。

○コモンを形成し新しい社会を目指す運動に感激・共同社会を作って行って対話が生じる・市民が統制していくうえで、エゴと怠慢から出られない危険は感じる・原罪から逃れられない宿命にあるのではないか？キリスト者にしかできない取り組みをしたい。

○コロナにより、もう一度原点に帰らされた・変革期の現在、アメリカは効率を求め、病院を少なくしたので、多くの人が死んだ・日本は皆が保険に入っているので助かっているが、競争原理も動き出して、費用削減を国は目指している・必要な医療が少なくなりつつある・医療こそコモンの精神が必要・

○斎藤さんの本の後に、白井さんの本を読んだ・年休が 20 日あるが、休むと同僚が大変になると遠慮して取りづらい。仕事が遅い人が年休を取ると批判的に見てしまう。資本側の論理に自分が包摂＝取り込まれてしまっているのに気が付いた。人権という視点で、生きるために必要なものをコモンとして行きたい。（水・電気など生活に欠かせないものを手に入れられないアフリカの人たちは、生きるために必要な人権を侵されていると見ましょう。）

○（少子高齢化の）人口問題も若者のこともつねづね思っていることは、小泉政権で自己責任・非正規が増えた。結婚もむつかしい若者・子供も産めない・老人が増える。企業に有利な政策、マルクスは良く知らないが、150 年前の物が今、必要になっているとおもった。大きいことを動かすことは出来ないが奈良と同じく小さいことで活動を開始したい。

○斎藤さんの話を聞いて、コモンを生きたのはエルサレムの共同体で、全てを共有し貧しい人が一人もいなかった。これはトラピストに引き継がれている。

○マルクスは共産主義と思っていたが、地球全体を考えているとわかった。中国、ソ連は疑問。岸田総理の新しい資本主義の内容が見えてこない。昭和の経済発展が、農民を疲弊させている、アボガドの位置づけを変えねば。安いものを愛徳姉妹会の台所で買うが、生産している人の事まで考えていきたい。快楽がひどすぎる。

○社会の富を共有し合う、市民の連帯活動を身近で感じられる。年齢的には 10～15 年しか先はないが、若い人とも、おおいに活動してほしいと思っている。

○富をお金でなく、森・空気・水と見れば、考えが変わってくる。安いものを買ってきたが、生産者への思いが欠けている。コモンを身近で思うとヤマギシイズム（自然の中の共同生活）軽トラで売りに来る。コープも昔は良かったが、今は普通になってしまった。良いものは高いので矛盾がある。

○物質代謝、ソ連崩壊、靴工場、資本主義を修正する方が現実味がある。脱成長には節制が必要だから、（この分科会では）もっと節制を言ってほしい。人間は管理者に過ぎぬ、パパさまのラウダート・シの勧告を自分のものにしたい。愛するアマゾンで、先住民の良い生き方＝宇宙の和、質素な暮らしに充足を得る。自然保護。先住民はわずかなもので幸せになり、生態系を守っています。回勅を基本に据えて行動したい。

○動画を見て、別々にコモンの裏付けが繋がっていった。例として、１９９５年イエローストーン公園で狼のカナダからの再導入があった。ヘラシカの食害がひどくて再導入されたのだが、鹿を狼が食い尽くすかが危惧されたが、杞憂で、生態系が緑に戻った。ルーバンの町：革新による解決策で１億２０００万円の賞を獲得。バルセロナの再公営と民営のバランスが難しいので市民が手を抜かずに集中している。

○SDGs は普及している。バッチつけてる人が居るし、企業の推進で、社会貢献し、宣伝ではあるが 2015 年国連総会で採決されているし、来年は高校家庭科のトップに載っている。これを抜きにしてはどうしようもない。マラリアの防御用の蚊帳を住友化学が作り、100 万人の病人が 400 人に減った。とりあえず、SDGs を生かした方が良い。

○全部、SDGs は悪いとは言っていない。否定ではない。斎藤さんのアヘン説を読むまでは、SDGs で、全てＯＫと思っていた。

以上で、意見交換会は終わりました。締めくくりに、おおた提案を持って会を閉じました。

おおた提案（ステップ④Act　＝行動する）

「脱成長コミュニスム」は、提唱者の斎藤幸平さんが、いろんな講演会や対談で言っているように、資本主義社会の根本的衝動＝無限の成長に「待った」をかけて、人間を商品に貶めている現状から、『使用価値に重きを置き、過労死を防ぎ、必要に応じて「受け取り」必要に応じて「与える」働きを人間に取り戻す』社会変革を進める運動です。

正義と平和大阪大会の後でも、ZOOM なりサクラファミリア会場を利用して、運動を続けなければ、もったいないことになります。そこで、100 分 de 名著：斎藤幸平さんのビデオ・25 分の、②過労死　③技術革新　を見る集いを、まず、2022 年 1 月 29 日に開きます。

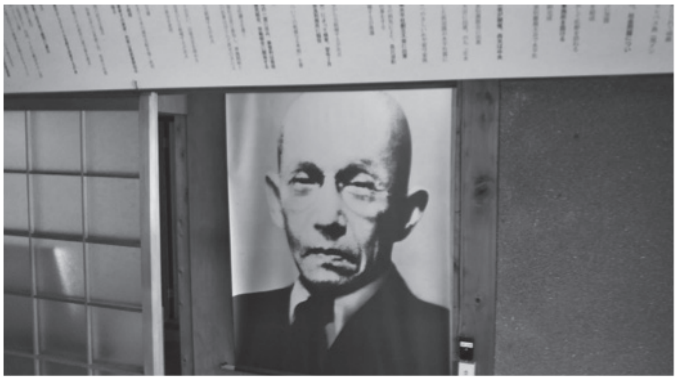
ミニ旅　レポート

和歌山県紀の川市　～西光万吉記念館～

深堀安希子（和歌山紀北教会）

2021 年 9 月末、両親と共に、和歌山県紀の川市にある西光万吉記念館に行ってきました。2016 年にオープンしたまだ新しい記念館です。ニュース和歌山という新聞に紹介されており、今回訪ねるきっかけとなりました。（見学は無料、予約制。）

万吉さんに縁のある地といえば、まずは生誕地である奈良県御所市が思い浮かぶのではないでしょうか。ここ紀の川市は“永住の地”です。寓居跡を改装した記念館には、遺品や絵画作品などが保存されています。青年期に画家を志したという万吉さんの日本画もあり、この地域で有名な医者 華岡青洲を万吉さんが描いた戯曲作品があることにも驚きました。遺品の品々からはこの地域に暮らした様子や万吉さんの人となりと、ここに暮らす人たちの関りが伝わってきました。この日は館長さんと、案内してくださる方のお二人がおられ、万吉さんの生涯を丁寧に教えてくださいました。



万吉さんは、1895 年に御所市に生まれます。青年期には画家を志し上京。帰郷後は旧友と共に活動し、1922 年に創立された全国水平社の水平社宣言起草者、荊冠旗の考案者として知られています。その後は、共産党弾圧事件で検挙され、奈良刑務所で服役、思想転向を迫られます。出所後に美登利さんと結婚、死別し、妹の美寿子さんと結婚。この美登利さん、美寿子さんの故郷が紀の川市であり、当時、奈良では活動しにくくなっていた万吉さんは移住します。医者をしていた義兄の方が紀の川市（当時は那賀郡）でなら活動できるのではないかと考え呼び寄せたということです。

時代は太平洋戦争へと突入し、自身も国粋主義的な活動をしたこと、戦争に加担したことに責任を感じ、敗戦後にピストル自殺を計りますが、友人がピストルに細工し未遂に終わらせたそうです。戦後は日本国憲法の平和主義（特に憲法九条）に共感し、「和栄政策」（＝防衛予算を削減し、途上国への協力に充てる……等の政策。）の思想を広める活動を生涯続けていたということでした。

この記念館は有志の人によって成っており、運営も「手弁当です」とおっしゃる館長さん。広くこの地と西光万吉を紹介したいお気持ちと、知られることを不安に思う住民もいらっしゃることへの配慮の間にありながらも、大変熱く語ってくださいました。館長さんによると、水平社宣言には二つの大切なポイントがあるそうです。

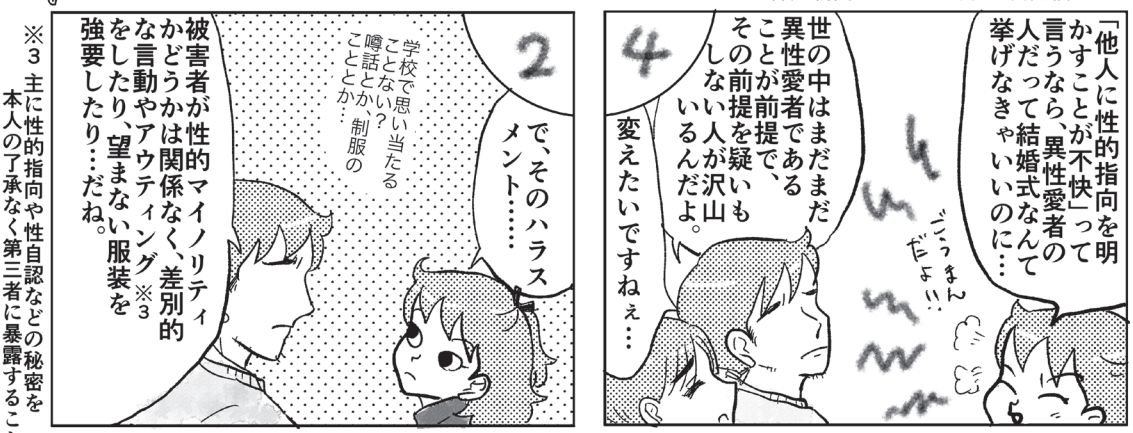
それは、**①人間は元来いたわるべきものではなく尊敬すべきものである。②傷つけられた虐げられた自分たちには、そういう人たちの気持ちが分かるので、みんなを力づけたい。**ということです。

この‘人間は尊敬すべきものである’というメッセージはゴーリキー（1868-1936 ロシア）の戯曲『どん底』から引用されたもので、水平社宣言の最も大切なメッセージと言われています。おそらく自分自身や周囲の人々の体験、そして世界にある様々な思想、宗教等に触れ模索しながら、若き日の万吉さんが導き出した確信なのだろうと感じました。戦後は思想的‘転向者’と言われ、あまり顧みられなくなったということもあったそうですが、住民からは慕われ、晩年まで和栄政策について考え話していたそうです。万吉さんの大きな夢に触れ、万吉さんを慕った人たち、支えた環境のあるこの地を訪れることが出来て良かったです。私のレポートではうまく伝えきれないことがたくさんありますので、ぜひ一度、西光万吉記念館を訪れてみてください♪

本年（2022 年）は、水平社宣言から 100 年目を迎えます。“人間は尊敬すべきものである”というメッセージに心を傾け、新たな歩みの年となりますように。

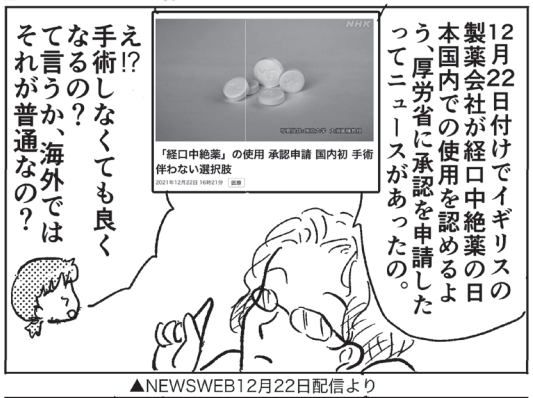
#76 "SOGIハラスメント"とは…?

▲神戸新聞NEXT　12月15日配信

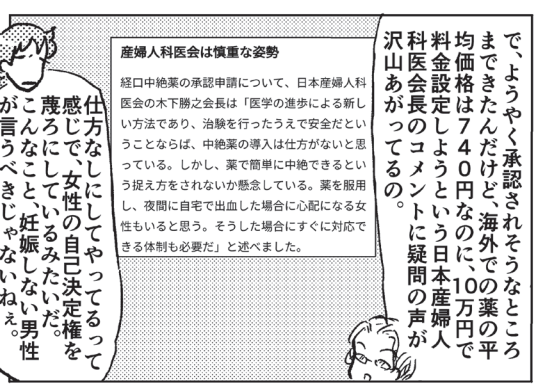


※3 主に性的指向や性自認などの秘密を本人の了承なく第三者に暴露すること

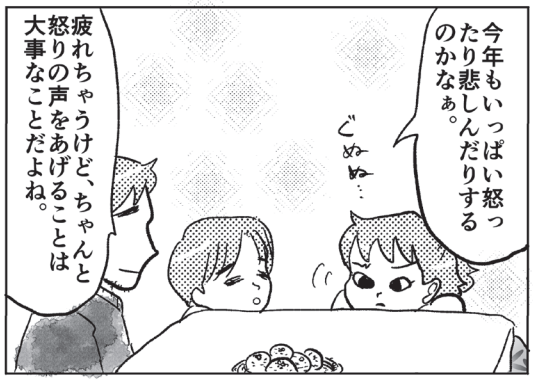
#77 女性の身体のことは女性で決めたい！

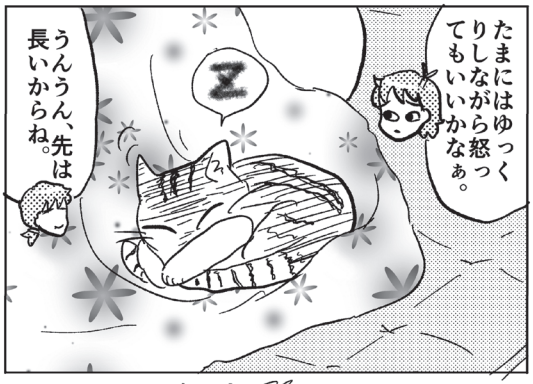


▲NEWSWEB12月22日配信より



#78 Anger is an Energy!!





2021.Dec.27.

第 13 回対話集会

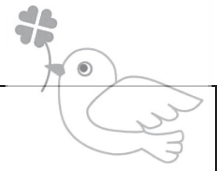
冬枯れの光景　　Ⅱ

日　時：2022 年 2 月 23 日（水・祭）　13：30 受付　14：00～17：00
場　所：大阪梅田教会サクラファミリア　4F
発題者：谷元昭信さん（元部落解放同盟中央書記次長/大阪市立大学・関西学院大学非常勤講師/部落解放論研究会世話人）

「解放運動の冬枯れから春へ」をメインテーマに「解放運動を変容した部落実態に適応した運動に」をサブタイトルに 2019 年 10 月に対話集会を開催しました。今回はパートⅡとして前回の対話をさらに深かまることを期待しながら・・・

・・・・・・・・・・・・・・キリトリ・・・・・・・・・・・・・・・

第 13 回対話集会申込書



名　前：	
住　所：	所属：
連絡先：Tel　　fax e-mail	

参加費無料　　定員 18 名（先着順）

コロナの感染状況によっては Zoom ウエビナーのリアルタイム配信になる場合があります。その時は参加申込者に連絡いたします。

申込先：カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター
Tel:075-366-6609　Fax:075-366-6679
e-mail：bukatu@kyoto.catholic.jp

大阪大正区沖縄タウンフィールドワーク

日　時：2022 年 3 月 26 日（土）
会　場：なみはや教会　（JR 環状線　大正駅下車徒歩 14 分）13 時～
大阪市大正区三軒家東 5-11-7
案　内：安田耕一さん

沖縄へ行かずに、沖縄を知ることのできるのが「沖縄タウン」で、大阪市の大正区にあります。大正区は本土＝ヤマトでは、一番沖縄出身者の多い所です。第一次世界大戦後の不況で、砂糖価格が暴落、毒を含むソテツの実や幹を食べて飢えを凌ぐ沖縄の人たちが、生きる術を求めて、阪神の製紙・紡績などの工場に労働者として、働きに来ました。彼らが集住できたのが、大正区のくぼ地＝グブンガアーでした。このくぼ地の沖縄出身者の居住権闘争は、解放同盟の経験を生かして、たたかわれました。ナミお婆の「沖縄人を窪地クブンガアーから追い出す前に、米軍に奪われた沖縄の“我が土地”返せ」との正義を求める叫びの底深さを参加者皆で学びたいと思います。

参加申込は**カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター**まで

申込はお名前・連絡先住所・TEL・所属を明記の上
下記事務局まで FAX・e-mail にてお申込みください

申込先：カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター
Tel:075-366-6609　Fax:075-366-6679
e-mail：bukatu@kyoto.catholic.jp

なみはや教会周辺地図

転び（キリシタン）の系譜、出会い直しの「旅」⑤
浦上四番崩れの和歌山藩流配～番外編～

深堀安希子（和歌山 紀北教会）

幕末から明治のはじめにかけて、まだ宣教師による日本人への積極的な宣教が公には許可されていない頃に、主体的にキリスト教に接近して来た人々にはどのような事情があったのでしょうか。今回は、浦上四番崩れと関係するカトリック教会の資料から知ることのできる、神戸居留地・川口居留地を巡る人々の様子をご紹介したいと思います。

1868 年から神戸居留地に赴任したパリ外国宣教会のムニクー神父と 1869 年から川口居留地に赴任したクーザン神父のもとには１０人の日本人が居たそうです。長崎から呼び寄せた人もいれば、四番崩れの先発隊として流配（※1）され、脱走してきたという信徒もいました。脱走者の信徒のうち一人は神戸居留地に建てられた教会の大工をしたそうです。禁教令下の宣教師たちは、神戸、川口に限らず、「使用人」の名目で教会に日本人信徒を入れ、日本人への伝道師として教育していました。時々、スパイの存在を気にするムニクー神父の書簡からもその難しい情勢が感じられます。（※2）

1869 年のクリスマスには大坂で一人の役人が洗礼を受けたようですが（※3）、どのような人であったかは分かりません。ちょうど四番崩れの流配者が大坂（天保山）に寄って通過する頃です。そのような頃に受洗を望むのには、並々ならぬ事情があったのでしょうか。また、1870 年には、神戸の貧しい人の中で暮らし伝道士の家族のペトロ・モイチに指導されたという青年が洗礼を受けたようです。この伝道士モイチもどのような人かは分かりませんが、四番崩れの脱走者で宣教師のもとで働き各地の流配者を訪ね歩いた「モイチ」という人がいたことは他の書籍でも紹介されています。（※4）1870 年を過ぎると、居留地には何人もの四番崩れ流配者が訪問してきます。伊勢、福山、徳島、加賀、名古屋、津和野などからも漁船や徒歩で来たようです。流配者の多くは、神戸居留地や川口居留地に天主堂があり宣教師が居ることを周知していました。往来や手紙のやりとりは長崎に帰還するまで続き、メダイなどをもらう人、赦しの秘跡や聖体の秘跡に与る人、洗礼の秘跡を受ける人、中には流配者同士の結婚の秘跡に与かったり、生まれた子どもに洗礼を受けさせた人もいたようです。1872 年の棄教者の帰還時に、居留地の教会ではどのような対応がなされたのかは分からないため、今後資料を探し検証したいと思います。1873 年の非改心者の帰郷時には、宣教師たちも帰還の状況を積極的に情報収集していたようで、帰還者が神戸の教会に集まった様子や、ムニクー神父帰天後に後任として神戸に居たヴィリオン神父が、長崎までの船が

ない人に船や旅支度を工面する様子も書簡や日記に見ることができます。中には長崎に帰還せずに居残った人や再び戻ってきた人もおり、居留地の教会とその後開院される孤児院（※5）では、カテキスタとしてや、孤児の養父母となる人、孤児のお世話をして働く長崎出身者の人々の姿も見られます。

当時は宣教師を含め、居留地にいた外国人と日本人の一般庶民との接触には制限があったようですが、宣教師たちが日本人信徒を「使用人」として側に置いたように仕事としての接触は可能だったのでしょう。四番崩れ流配者のうち、徳島や和歌山への流配者は、居留地に鮮魚を届けるための商用運搬の漁船で往来したとあります。(※6)
鹿児島への流配者からの手紙は、肉屋を介して受け取ったともあり（※7)、当時、外国人向けの牛肉の供給を求められた日本人がいたことや、牛肉専門店発祥の地と言われる神戸牛の歴史の一旦が伺えます。そのような数少ない接触の機会が、宣教師たちと日本人との出会いの機会ともなっていたことでしょう。

また、この時代のキリスト教布教と、かつてのキリシタン時代との大きな違いの一つとして、どのような宗派が来日したかということがあります。キリシタン時代がカトリック教会のみ来日したのに対し、幕末からの布教ではハリストス正教会、聖公会、プロテスタント教会の宣教師もそれぞれ来日しています。四番崩れ流配者を気にかける様子は他宗派の宣教師たちにも見られ、禁教令の高札撤去までは、比較的各派の連携・協力関係があったような印象さえ受けます。ところが、その後のキリスト教解禁以後には、宗派間の度を越した先陣争いのような側面も見られ、現代のエキュメニカルな感覚で読むと残念なほどと思わされる表現も多々見受けられるのですが、それもまた歴史の一つの事実ということでしょうか。和歌山に於いては、プロテスタント長老派の宣教師タムソンが、米国事情を学びたいという和歌山藩に招致された際、四番崩れの流配者を目撃し、後に英字新聞へ投稿して日本の信教の自由を働きかけたということも紹介されており(※8)、そのような他宗派との関わりも、今後大切な視点となってきます。

今回、浦上四番崩れの和歌山藩流配を追う中で、幕末から明治のはじめという激動の時代の人々の様子を僅かにですが垣間見させてもらえたように思います。政府も法も、価値観も様々に変わりゆく中で、まだ禁教令の高札が掲げられた最初期の教会にいた人々の姿は“飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿をかし、裸のときに着させ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた”という聖書の言葉が重なりました。私たちが時代を経ても変わらない大切にしたいものが何かを教えられたように思います。次回からは、和歌山の話に戻り、明治以降の和歌山のキリスト教についてご紹介出来ればと思っています。

〈引用・参考文献〉

※1　一斉検挙の前に流された 114 人のこと。浦上四番崩れでは 1868 年に主な信徒 114 名、その後、段階的に浦上村のキリシタンが検挙され西日本 20 藩 22 箇所に流されました。

※2　ショファイユの幼きイエズス修道会(訳)「七つの御悲しみの聖母天主堂創立者パリ外国宣教会宣教師ピエール・ムニクー師と同僚宣教師の書簡」より。

※3　ショファイユの幼きイエズス修道会(訳)「七つの御悲しみの聖母天主堂創立者パリ外国宣教会宣教師ピエール・ムニクー師と同僚宣教師の書簡」より。

※4　片岡弥吉著「浦上四番崩れ」より。

※5　1877 年に来日した幼きイエズス修道会による孤児院。センタンファンスと名付けられ、神戸と後に川口居留地に設立されました。

※6　池田敏雄著『ビリオン神父―現代日本カトリックの柱石 慶応・明治・大正・昭和史を背景に』より。

※7　浦川和三郎著「浦上切支丹史」、他より。

※8　守部喜雅著『日本宣教の夜明け　47 都道府県それぞれの物語』より。

菊池事件再審請求を求める署名のお願い

究極の人権侵害・菊池事件の再審開始を求める署名にご協力ください。

菊池事件とは、ハンセン病患者に対して、「絶対隔離・絶滅政策」と呼ばれる過酷な政策を推進し、その効率的な遂行のために官民一体となった患者あぶり出しのための「無らい県運動」を全国的に展開していた中で、熊本県の強い要請を受け、ハンセン病患者の現況調査を行ない、これを通報した熊本県Ｓ村（当時）役場の元職員が殺害されたという事件です。この通報の対象とされたＦさんが、通報を逆恨みして起こした事件だと疑われ、逮捕・起訴されたのですが、取り調べも、それに引き続く裁判も、予断と偏見に満ち、本来被告人が持つ裁判上の権利も認められないまま、ずさんな裁判が行われ、死刑判決がくだされました。

非公開で開かれた特別法廷は、「消毒液のにおいがたちこめ、被告人以外は白い予防着を着用し、裁判官や検察官は、ゴム手袋と箸で、証拠物を扱い、調書をめくるのに火箸を用いた」と言われています。再審請求が三度にわたって取り組まれましたが、三度目の再審請求が棄却された翌日、１９６２年９月１４日、死刑が執行されました。

菊池事件の被告人の名誉と尊厳を取り戻すべく再審開始が決定されるよう、署名にご協力下さい。